陸自と海自の特殊部隊レジェンドの緊急対談

日本をどう守るのか

荒谷卓×伊藤祐靖

〈〈1〉〉

世界情勢が激動するなか、日本をどう守るのか―。陸上自衛隊に「特殊作戦群」（特戦群）を創設し、初代群長を務めた荒谷卓（あらや・たかし）氏（63）と、海上自衛隊の「特別警備隊」（特警隊）創隊に携わり、初代先任小隊長となった伊藤祐靖（いとう・すけやす）氏（58）が、夕刊フジの緊急対談に応じた。陸・海で自衛隊最強の特殊部隊を率い、退官後も伝説的存在として現役自衛官らの信頼を集める2人の〝猛将〟が、国際紛争の裏側にも精通する鋭い読みで、ウクライナ紛争や「台湾有事」についての見解を語り、日本が直面している重大な危機も明かした。

（取材・構成、丸山汎）

―特警隊、特戦群は「自衛隊の切り札」と言われる

伊藤氏「特警隊は、私がイージス艦の航海長だった1999年、日本人を拉致した可能性がある北朝鮮の工作母船を追跡した事件が契機となって、拉致を二度と許さず、日本人を奪還するためにつくられました。隊員は皆、自分の命よりも任務を優先するという習慣があります」

荒谷氏「一般部隊では不可能な作戦でも特戦群は遂行します。特戦群ができなければもう代替はなく、『最後はお前らに頼む』と言われれば、どんな状況下でも出動できる能力を保持しています」

―特殊部隊とは何か

荒谷氏「その国の政府が特殊部隊に何を期待するかで決まります。冷戦後の世界は、国の枠組みを超えて拡大するグローバル資本主義を抜きに語れません。私が特戦群創設のために留学した米グリーンベレー（陸軍特殊部隊）では、CIA（中央情報局）などの謀略活動とも連動し、政府転覆や、外国政府支援を行っています」

―現在のウクライナ情勢をどう見るか

伊藤氏「日本の報道ではウクライナ側に立つ発信がほとんど。報道機関には姿勢だけでもウクライナ発信とロシア発信の情報比率を同じにしてほしい」

荒谷氏「日本での論調は『悪いのはロシア』という一辺倒ですが、もう少し慎重になるべきです。現地情報を収集すると、日本の報道とのギャップが甚だしい。日本政府も米国から提供される情報に依存して世界を見ています」

―日本では、ロシアの苦戦を伝える報道が多い

伊藤氏「ウクライナは物理的に勝てない戦（いくさ）です。『大相撲の横綱とわんぱく相撲の横綱』の勝負みたいなもんです」

荒谷氏「ウクライナの勝利は軍事的常識からは、あり得ません。ロシアは制空権をずっと保持し、ウラジーミル・プーチン大統領が発令した特別軍事作戦の目標地域は昨年5月にはほぼ占領し、いまも大きな変化はない。最初から全面戦争は避けているので、作戦の目的は達成して、もうカタは付いてしまった」

―「ロシアは一方的に侵略した」と非難されているが

伊藤氏「時間軸で見ていけばおかしい。80年前の日本もこうして非難されたんだろうと思いますね」

―プーチン氏が西側諸国から批判される理由は

荒谷氏「彼が『反グローバリズム』を掲げているからでしょう。冷戦後の1990年、当時のジョージ・ブッシュ米大統領（父）が『ニュー・ワールド・オーダー（新世界秩序）』を宣言し、欧米の特殊部隊の主任務は、グローバリズムの新秩序をイスラム諸国家と旧共産圏へ広げることになりました。米国は中東などで『アラブの春』を起こして従わない政権を転覆させ、東欧ではウクライナなどで『カラー革命』を起こしてNATOを拡大させた。米英のグローバル勢力にとって最後の障壁がプーチン氏で、今回はいわば最終決戦でした」

―今後の見通しは

荒谷氏「米主導の経済制裁も失敗し、ここまではプーチン氏の計画通りに進行している。ただ、NATOとロシアは激突寸前で一歩間違えば第三次世界大戦が現実になる。心配なのはいまの日本がウクライナが戦争に入る2年ほど前の状況と酷似していること。このままなら戦争に突入してしまう」

いまの日本は2年前のウクライナに酷似

荒谷氏「推移を客観的に見ることが重要です。ウクライナでは、オレンジ革命（2004年）、マイダン革命（14年）と2度も米国の介入により、民主的に選ばれた親露政権が転覆されている。以降もウクライナ東部ではロシア系住民が殺され、NATO（北大西洋条約機構）との共同訓練も拡大し、米国製ミサイルも配備された。昨年2月にはウクライナ軍の約70％がロシア国境に集結した。これでプーチン氏は攻撃に踏み切りましたが一方的と呼べるでしょうか」

伊藤氏「時間軸で見ていけばおかしい。80年前の日本もこうして非難されたんだろうと思いますね」

―プーチン氏が西側諸国から批判される理由は

荒谷氏「彼が『反グローバリズム』を掲げているからでしょう。冷戦後の1990年、当時のジョージ・ブッシュ米大統領（父）が『ニュー・ワールド・オーダー（新世界秩序）』を宣言し、欧米の特殊部隊の主任務は、グローバリズムの新秩序をイスラム諸国家と旧共産圏へ広げることになりました。米国は中東などで『アラブの春』を起こして従わない政権を転覆させ、東欧ではウクライナなどで『カラー革命』を起こしてNATOを拡大させた。米英のグローバル勢力にとって最後の障壁がプーチン氏で、今回はいわば最終決戦でした」

―今後の見通しは

荒谷氏「米主導の経済制裁も失敗し、ここまではプーチン氏の計画通りに進行している。ただ、NATOとロシアは激突寸前で一歩間違えば第三次世界大戦が現実になる。心配なのはいまの日本がウクライナが戦争に入る2年ほど前の状況と酷似していること。このままなら戦争に突入してしまう」

最強の特殊部隊を率いた荒谷卓氏（右）と、伊藤祐靖氏

あらや・たかし 1959年、秋田県生まれ。東京理科大学卒業後の82年に陸上自衛隊入隊。第1空挺団などに所属後、ドイツ連邦軍指揮幕僚大学に留学。帰国後、陸幕防衛部・防衛局防衛政策課勤務時に特殊部隊創設を提案。米国特殊作戦学校に留学し、2004年に編成された特殊作戦群群長。08年退官（1等陸佐）。明治神宮武道場至誠館館長を務め、18年に三重県熊野市に「国際共生創生協会『熊野飛鳥むすびの里』」を開設。著書に『戦う者たちへ』（並木書房）など。

いとう・すけやす 1964年、東京都生まれ。日本体育大学卒業後の87年に海上自衛隊入隊。イージス艦「みょうこう」航海長だった99年に発生した能登半島沖不審船事件で北朝鮮の工作母船を追跡した経験から、自衛隊初の特殊部隊設立に携わり、2001年に特警隊先任小隊長に。07年に退官（2等海佐）。現在は全国での講演や執筆活動を行う。著書に『国のために死ねるか』（文春新書）、『邦人奪還』（新潮社）など。

日本をどう守るのか

荒谷卓×伊藤祐靖

〈〈2〉〉

日本を「第二のウクライナ」にするな

――日本と、開戦前のウクライナが酷似しているとは

元陸上自衛隊「特殊作戦群」初代群長、荒谷卓氏「ウクライナでは紛争前年の2021年、極東へ向かう英海軍の空母打撃群から、ミサイル駆逐艦が離脱して黒海沿岸のオデッサに寄港しました。同10月には、米国が約180基のミサイルを供与してウクライナに配備しました。12月には米82空挺師団が派遣され、ウクライナ軍の訓練を始めました。ウクライナ軍が国境に兵力を集めた瞬間、ロシアが軍事作戦を開始した」

――では、日本は?

荒谷氏「東京にNATO（北大西洋条約機構）の連絡事務所を置く話が取り沙汰されています。21年は前述の英空母打撃群が横須賀基地（神奈川県）などに寄港し、再び25年に自衛隊と合同演習を行うため訪日します。岸田文雄首相は防衛費増額を決めて、巡航ミサイル『トマホーク』を米国から買い、全国に配置する計画。これでロシアとの国境近くで大規模演習が行われれば、ウクライナの開戦前と同じ状況になります」

参戦している認識が甘い

元海上自衛隊「特別警備隊」初代先任小隊長、伊藤祐靖氏「6月にウクライナ南部のカホフカ水力発電所で起きた巨大ダム決壊は、米国でさえロシアの犯行と結論付けていないのに、岸田首相は7億円の支援を発表した。自衛隊車両を100台送り、負傷したウクライナ兵士を自衛隊病院で手当てして、ウクライナで使う砲弾のTNT火薬の供与も検討したという。軍事常識から言えば、『日本は対ロシア戦の後方作戦に参加している』ことになります。いつロシアから反撃されてもおかしくない。その認識を持っている日本人は少ないのではないでしょうか」

荒谷氏「日本は、戦争行為がどこから始まるのかという国際常識の認識が甘すぎます。第2次安倍晋三政権下で、日本の安保法制には『存立危機事態』という概念が書き込まれた。NATOとロシアが戦争になっても、日本に直接の軍事的リスクは何もありません。それでも、もしNATOとロシアが激突して米露が戦争状態となり、米国が『存立危機事態』を根拠に自衛隊の防衛出動を要求してきたら、岸田首相は断れるでしょうか。なぜ、国民的合意もないのに、日本が戦争当事者になる必要があるのか。それによって、日本領土に核が飛んでくる可能性もある。欧米の著名シンクタンクでは、横須賀基地や佐世保基地（長崎県）から発進した米原潜がロシアへ核ミサイルを撃ち、その報復攻撃を日本が受けるというシミュレーションもされています」

伊藤氏「その通りですよ。シミュレーションとは、可能性があるから行う。日本のいまの行動からすれば、やられたって仕方がない」

荒谷氏「対露戦略に日本を利用するのは、日露戦争、米ソ冷戦を通じた米英の伝統的戦略思考です。現在のNATOと同様、明治期の日英同盟も当時は『最大の安全保障』という触れ込みでしたが、日露開戦は同盟締結からわずか2年後でした」

――在日米軍はどう動くか

伊藤氏「よく、『米軍は日本を守るか?』と聞かれるんですが、それを判断するのは米軍ではなく、米国ですよ。要するに軍人ではなく、政治家です」

荒谷氏「ロシアを相手に米国が戦えば、第三次世界大戦であり核攻撃は必然となります。日本の防衛のために、米国がそんな決断をすると思いますか? いまのウクライナを見れば分かりますよ。気が付けば日本人だけが戦場に取り残されかねない。ウクライナは代理戦争をさせられています。米英のグローバル勢力は、ウクライナではロシアにぶつける相手に役不足だったので、次は日本を『第二のウクライナ』にしたいのでしょう」

（取材・構成、丸山汎）

「日本の危機」について語る荒谷卓氏（右）と、伊藤祐靖氏

あらや・たかし 1959年、秋田県生まれ。東京理科大学卒業後の82年に陸上自衛隊入隊。第1空挺団などに所属後、ドイツ連邦軍指揮幕僚大学に留学。帰国後、陸幕防衛部・防衛局防衛政策課勤務時に特殊部隊創設を提案。米国特殊作戦学校に留学し、2004年に編成された特殊作戦群群長。08年退官（1等陸佐）。明治神宮武道場至誠館館長を務め、18年に三重県熊野市に「国際共生創生協会『熊野飛鳥むすびの里』」を開設。著書に『戦う者たちへ』（並木書房）など。

いとう・すけやす 1964年、東京都生まれ。日本体育大学卒業後の87年に海上自衛隊入隊。イージス艦「みょうこう」航海長だった99年に発生した能登半島沖不審船事件で北朝鮮の工作母船を追跡した経験から、自衛隊初の特殊部隊設立に携わり、2001年に特警隊先任小隊長に。07年に退官（2等海佐）。現在は全国での講演や執筆活動を行う。著書に『国のために死ねるか』（文春新書）、『邦人奪還』（新潮社）など。

日本をどう守るのか

荒谷卓×伊藤祐靖

〈〈3〉〉

「台湾有事」「尖閣有事」をどう見るか

――「台湾有事」が起きればどうなるか

元陸上自衛隊「特殊作戦群」初代群長、荒谷卓氏「中国の台湾侵攻は、まずあり得ません。グローバル経済システムの恩恵で経済大国となった中国にとって、軍事的手段を取る必要はない。むしろデメリットの方が大きい。軍事的にも、台湾を占領するとなれば、相応の戦力を海と空経由で台湾に展開する必要がある。だが、現在の中国が陸上戦力を運べる能力は、どんなに試算しても同時数個大隊がやっとです。そんな貧弱な地上兵力では、やられに行くようなもので考えにくい」

元海上自衛隊「特別警備隊」初代先任小隊長、伊藤祐靖氏「敵前上陸は難しいんですよ。先の大戦の硫黄島でも、米軍は猛烈な空爆と艦砲射撃で上陸作戦に備えたが、最初に上陸した約9000人の米海兵隊は日本軍の一斉射撃で膨大な死傷者を出した。それほど損耗するということです。それだけのメリットが台湾にありますかね…」

荒谷氏「台湾も中国と戦争などしませんよ。事実、台湾では人々の話題にもなっていない。ロシアへの国際批判を見れば、欧州各国との貿易も好調な中国が戦争に踏み切ることも考えられない。『台湾有事』は日本だけで盛り上がっているのです」

――伊藤氏は2012年、沖縄県・尖閣諸島の魚釣島に上陸している。「尖閣有事」の可能性は

伊藤氏「私が上陸した時点では、中国に本気で火花を散らす気がないことは感じました。中国海警局の船と海上保安庁の巡視船の間に、私の乗っていた船が挟まれました。相手の細かい操艦を見れば彼らが、『面倒を起こすな』と言われていることがにじみ出ていた。中国が公船を出す目的は、国内向けの示威行動ではないか」

――米国は「台湾有事」へ積極的に動いているが

荒谷氏「近年のデフォルト騒動で明らかなように米国の財政は破綻に直面し、ドル覇権の生命線だった、原油取引をドル建てで行わせる『ペトロダラー』体制も崩壊しつつあります。ドル離れが加速し、米国の延命策は安全保障の危機をあおって軍事力を売るしかない。存在しないリスクをあおるショック・ドクトリンに乗りそうな国は、ウクライナ以外では現在の日本ぐらいです」

――覇権的な行動をとる中国は脅威では

荒谷氏「中国は、米英のグローバリストの投資によって育てられ、大国としての持続性はないと見ている。ウクライナ紛争では米国もロシアも欧州も疲弊し、傍観していた中国が唯一の大国になる可能性はある。だからこそ日本は自立した国家として無傷で残らなければならない」

――日本は戦争を回避できるか

伊藤氏「いまの日本政府には、国家としての意志が存在している気がしない。このままでは国じゃなくなる。怖いのはそれが当たり前になり、国民が『そういう国』とあきらめてしまうことです」

荒谷氏「ウクライナでは、ウォロディミル・ゼレンスキー大統領が国民総動員令を昨年2月、ロシアの軍事作戦開始当日に発令し、国民の18～60歳男性が最前線に駆り出されました。現在のウクライナ軍は民間軍事会社の傭兵ばかり。14歳の少年から70歳の老人まで徴兵されていると聞いています。このまま進めば、日本でも徴兵動員をかける準備をするでしょうね」

伊藤氏「現職の自衛官が、この現実を一番考えていると思います。『俺は一体、何のために、誰の意志で戦うのか』と」

荒谷氏「私も20歳ぐらいから国のために死ぬ覚悟を問いに問い詰めて四十数年になりますが、いまのままならただ国民を殺すだけの『日本を破壊するための戦争』に巻き込まれかねない。この1、2年が正念場です」

（取材・構成、丸山汎）

荒谷卓氏（左）と、伊藤祐靖氏

年金世代・予備軍　シニアの居場所

誰にでも開かれている

日常生活から終活の相談まで

年齢を重ねても、悩みが尽きることはありません。ぼんやりとした不安に包まれている人も多くいます。どこか心が楽になる場所はないでしょうか？

そこで思い出したのが、お寺です。筆者が子供の頃、近所のお寺とは法話を聞いたり悩みを話したりできる場所でした。老境が迫ってきた今、昔からの教えには、心を楽にしてくれるヒントがあるような気もします。しかし、都会暮らしが長く、お寺とは疎遠な生活を送ってきたゆえ、お寺と関係をつくればいいのかわかりません。

そんな気持ちに向き合ってくれるのが、「開かれたお寺」（ひょうぼう）する東京都の築地本願寺です。宗派を受け入れ、さまざまな外向動も展開しています。寺内「Tsumugi」の18品食は、よく知られています。築地本願寺教化育成部成田さやかさん＝顔写真＝は、

日本をどう守るのか

荒谷卓×伊藤祐靖

〈〈〈4〉〉〉

日本人が守ってきた国家理念は「共栄」

――日本が取るべき道をどう考えるか

元陸上自衛隊「特殊作戦群」初代群長、荒谷卓氏「日本人はいま戦争の当事者になるかどうかの瀬戸際にあります。ロシアや中国との戦いは日本のための戦争ではありません。善悪二元論や性急な判断を避け、互いに必要のない戦いで国を失うような愚を冒してはなりません」

元海上自衛隊「特別警備隊」初代先任小隊長、伊藤祐靖氏「世界の大きな変化も正確に認識されるべきです」

荒谷氏「ロシアのウラジーミル・プーチン大統領が提唱する多極化構想や反グローバリズムに賛同する国が増え、米国抜きの経済圏『BRICS（ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ）』の存在感は強まっています。西側でも国民主権を軽視するグローバリズムへの反発は高まり、本音では戦争を望んでいないG7（先進7カ国）の結束も揺らいでいる」

伊藤氏「グローバリズムとは、ある特定の人たちの価値観で全部を塗りつぶし、強制するものです」

荒谷氏「グローバリゼーションは、日本の国家破壊につながりかねません。ただ、守るべき日本の価値を国民共通的に持ち得ていない状況では国防は成立しません。祖先から受け継ぐ日本人という歴史的文化集団の一員たる自覚と、風土に対する愛着、その日本を自分が継承し、未来につないでいく使命感があっての国防です」

――現在の活動は

荒谷氏「それを育むため、三重県熊野市で『農業』『武道』『教育』を柱にした活動に取り組んでいます。一日本人として、守るべき日本人の価値観を体現する生活ぶりを、日本文化の根本である稲作を通じて示し、互いに助け合う日本的な共同体を再構築したい。同じ志で共同体再生に取り組む方々と手を結び、日本を本来の国に戻していこうと活動しています」

伊藤氏「手応えは」

荒谷氏「同じ思いを持つ方が予想したよりもとても多い。自衛隊にいたときよりも国のために仕事ができている手応えはよほど強いです」

伊藤氏「『日本の何を守るのか』は私もずっと自問してきました。最近ようやくそれが見えてきた気がするのです」

――具体的には

伊藤氏「契機は昨年3月に95歳で他界した父の言葉でした。陸軍中野学校出身で、蒋介石暗殺命令を受けたまま終戦を迎え、幼い私にも『何かをやるかやらないかはお前の価値観で決めろ。やるべきと思ったなら死刑になってでもやれ』と教えたような人でした。私は父に『ではなぜ、最後の一兵まで戦い抜けばと始めた先の戦（いくさ）を途中で止めたのか』と」

――お父さんは何と

伊藤氏「『開戦の詔（みことのり）と終戦の詔に全部書いてある』としか。何十回読んでも分からなかったが、昨年の年明けに突然、『万邦共栄ノ楽（たのしみ）ヲ偕（ともに）ニスル』との共通の文言に気付いたのです。ああ、この『共栄』こそが日本人が一番大切にしてきたもので、俺はこれが守りたかったんだと思いました。日本人は弱肉強食も一人勝ちの勝者も好きではない。建国以来、日本の全ての基準に『共栄』があり、それが日本の国家理念だったと」

――日本をどう守るべきか

荒谷氏「米国の衰退が明らかになりつつある。日米同盟さえあれば日本の安全は守られるという幻想は捨て、日本人であることの自覚を取り戻し、日本を全うする道を考えることです。他人はどうあれ自分一人でも日本そのものである生き方を貫くことが国防だと信じています」

伊藤氏「事実に色を付けず淡々と積み上げて状況を判断すること。『共栄』という理念は、いつの世でも、世界のどこでも必要なもの。それを貫き生きることが日本人の道だとすれば、日本を守ることは、年齢や性別、背景などを超え、誰もがいつでも始められる。私も譲れない日本の国家理念を貫くために残りの命を使おうとしています」

＝おわり

（取材・構成、丸山汎）

守るべき日本について思いを述べた荒谷卓氏㊨と伊藤祐靖氏

あらや・たかし　1959年、秋田県生まれ。東京理科大学卒業後の82年に陸上自衛隊入隊。第1空挺団などに所属後、ドイツ連邦軍指揮幕僚大学に留学。帰国後、陸幕防衛部・防衛局防衛政策課勤務時に特殊部隊創設を提案。米国特殊作戦学校に留学し、2004年に編成された特殊作戦群群長。08年退官（1等陸佐）。明治神宮武道場至誠館館長を務め、18年に三重県熊野市に「国際共生創成協会『熊野飛鳥むすびの里』」を開設。著書に『戦う者たちへ』（並木書房）など。

いとう・すけやす　1964年、東京都生まれ。日本体育大学卒業後の87年に海上自衛隊入隊。イージス艦「みょうこう」航海長だった99年に発生した能登半島沖不審船事件で北朝鮮の工作母船を追跡した経験から、自衛隊初の特殊部隊設立に携わり、2001年に特警隊先任小隊長に。07年に退官（2等海佐）。現在は全国での講演や執筆活動を行う。著書に『国のために死ねるか』（文春新書）、『邦人奪還』（新潮社）など。